

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

あさがおのようなお母さん

松任小学校五年

竹内 たけうち

菜々子 ななこ

私のお母さんは、なんでも話せていつも応援してくれるそんな在りです。まるであさがおの花のような人です。あさがおは、朝早く元気に咲き夕方になるとしぼんでしまします。お母さんの、朝早起きをして朝から夕方まで一生けん命働き、夜になると疲れてすぐ寝てしまうところが似ていると思います。

そんなお母さんが私を成長させてくれた出来事がいくつかあります。一つ目は、四年生の夏休みの時のことです。

「クロールが泳げるようになりたい。」

とお母さんに言いました。お母さんは、いやといわずに毎週日曜日に近くの屋内プールに妹といっしょに連れて行ってくれました。妹もみなから実際に泳いでクロールを分かりやすく教えてくれました。

「ほら、手が動いても足が止まるとるよ。バタ足せんなんよ。」

と声かけもたくさんしてくれました。お母さんのおかげで四年生の夏休みの最後に行ったプールで、二十五メートルを泳ぐことができました。今、私がクロール二十五メートルをらくらくに泳げるようになったのもお母さんが仕事の時間をけずってでも、いっしょに手を取り合って教えてくれたからだと思います。とても感しゃしています。

二つ目は、小さい時から習っているエレクトーンで何度もくじけそうになったときです。

「あきらめるなっつーの。まずやってみ。練習したらなんでもできるよ。うになるから。」

これがお母さんの口ぐせです。わたしはいつもお母さんに「できん。」「やりたくない。」などついつい弱音をはいてしまします。私がエレクトーンをはじめて一年ぐらいたった時、ワルツがどうしても両手でひけなくくやしい思いをしました。私は、

「もうやりたくないよ！ やめたいよ。」

とお母さんに言いました。お母さんは、

「あきらめたらだめや。もう少しやってみ。ねっ。」

とやさしくはげましてくれました。毎日ではないけれど、できるまでがんばりました。このときお母さんは、毎日続けることの大切さ、くじけたりもつたいたいというのを教えてくれたと思います。エレクトーンを習い始めてから五年、今ではアンサンブル大会に二回も出場させていただいて、みんな息を合わせて美しく音をかなでる楽しさを感じることができています。五年生になった今は、はじめたときよりも何倍もアンサンブルが楽しいです。お母さんのあの一言は、私の今につなげてくれたと思います。

そして三つ目は、妹とけんかをしてしまった時のことです。私のお気に入りのぬり絵を妹が知らぬまにぐつちやぐつちやにぬりつぶしてしまったことがあります。そして、私は大切なお気に入りだったぬり絵がだいなしになったことが悲しくて、泣いてしまいました。そんな時、お母さんが相談にのってくれました。私は泣きながら悲しい気持ちをお母さんに思いつ切りぶちまけました。お母さんは、

「わかったよ。それは悲しかったやろうに。でも、起きたことはしかたがない。受け入れよう。」

と言いました。きつとこのときお母さんは、ときにはあきらめる、そしてそれを受けいれることを教えてくれたのではないかと今振り返ってみると思います。そのときは、悲しかったけれど、お母さんにギョツとだきしめてもらって安心しました。

私のお母さんは、やさしくてなんでも話せていつも私のことを応援してくれました。また自分の時間をけずってでも、人のために一生けん命になれる人です。だから私は、そんなお母さんが大好きです。これからお母さんに助けてもらったり応援してもらったりしながらいろんなことにチャレンジしていきたいです。そしてお母さんのような人のために一生けん命になれる人になりたいです。